《査読付研究論文》

若年層のアディクション関連問題に対するソーシャルワーク（個別援助）

― 日本語文献を対象としたスコーピングレビュー ―

久保木智洸＊1・齋藤静保＊2,3

抄　録

【はじめに】若年層のアディクション問題は、その背景にあると考えられる「生きづらさ」との関連から、個別援助に焦点を当てたソーシャルワーク研究が必要である。本研究の目的は、国内における若年層のアディクション問題に対するソーシャルワーク（個別援助）研究をスコーピングレビューの手法を用いて概観し、その研究動向とギャップを明らかにすることであった。

【方法】JBI の PCC フレームワークに基づき、若年層のアディクション問題に対するソーシャルワーク（個別援助）に関する日本語文献を対象とし、CiNii および医学中央雑誌 Web 版（最終検索日：2025年10月14日）の系統的検索を行った。

【結果】最終的に５件の文献が抽出された。すべてが事例研究・実践報告であり、実践領域は教育・精神科医療領域に限定されていた。内容は主に「本人・家族との関係構築と介入」や「他機関・多職種連携（ケースマネジメント）」であったが、介入効果を量的に検証した研究や、理論に焦点を当てた研究は見当たらなかった。

【結論】国内の若年層アディクションに対するソーシャルワーク（個別援助）研究は極めて少数であり、実践知の蓄積が乏しいことが示された。今後は、多様な実践領域からの報告を蓄積するとともに、介入モデルの開発や効果検証研究が必要である。

キーワード：若年層、アディクション、ソーシャルワーク、ケースワーク、スコーピングレビュー

１．はじめに

アディクションとは、アルコールや薬物などの「物質依存」と、ギャンブルやゲームなどの「行動嗜癖」の総称として使用されることが多い語である。何かに依存をすることは誰しもが経験し得るが、依存対象に対するコントロールを喪失し、身体的・精神的・社会的な問題が表出し始めてくると、アディクション問題として立ち現れてくる。

アディクション問題を抱えた者が「なぜ何かに依存し続けるのか」という問いに対する仮説として、「物質依存」に関してはアメリカの精神科医である Khantzian（1985）が提唱した「自己治療仮説」が浸透しつつある。Khantzian らの書籍を翻訳した松本は、この理論について「人が依存性物質を使用し、それに依存してしまうのは、その物質が持つ、耐えがたい心理的苦痛や苦悩を緩和する効果に起因」するとしている（松本訳 ,2013）。この理論に基づくと薬物依存症者は、アディクション

（所　属）
＊１山梨県立大学人間福祉学部　　＊２東洋大学大学院ライフデザイン学研究科ヒューマンライフ学専攻
＊３特定非営利活動法人川崎ダルク支援会

問題が発生する以前から抱えていた多様な困難による苦痛を緩和するために、アルコールや薬物を自己治療的に使用するということである。また「行為嗜癖」においても同様の仮説で捉えることができる。実際、米国精神医学会が作成している精神疾患の診断分類であるDSM-5-TR（Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Fifth Edition, Text Revision）ではインターネットゲーム障害を「今後の研究のための病態」として記載し、その特徴の１つに「否定的な感情の回避や軽減目的の使用」を挙げている（American Psychiatric Association, 2022）。

こうした背景を持つアディクション問題を抱えた者に対するソーシャルワークは、多様な現場で展開され、そのあり方が模索されてきた。山本（2015）は、アディクションアプローチの視点として、①対人関係の難しいクライエントの理解、②援助を拒む人へのインターベンションアプローチ、③家族関係に問題がある状況の理解、④生活支援のなかで生じるアディクションへの支援、という４点を挙げている。すなわち①については、人に対する信頼感を持てなくなった者が少なくないことへの理解、②については、アディクション問題に対する「否認」へのアプローチとしてのCRAFT（Community Reinforcement and Family Training）や動機づけ面接の導入、③については、家族システム論に基づき家族全般に働きかける視点、④については、生活支援の対象者（高齢者や障害のある方）が抱える生きづらさはアディクションに繋がることがあり「生きる価値を取り戻す支援」が必要、といった視点が重要であるとされている。

しかし、こうしたアディクションに対するソーシャルワークは、主に成人に対する支援が基盤となった理論であり、若年層のアディクション問題に対するソーシャルワークのあり方は未だ確立されていない。昨今、若年層のアディクション問題が社会問題化されており、主に市販薬・処方薬のオーバードーズやネットゲーム依存の状態にある若年層が増加している。例えば、市販薬を乱用目的で使用した経験のある中学生は約55人に１人である（嶋根ら ,2024）ことや、薬物問題により受診した経験のある10代のうち、約７割が市販薬の乱用による受診である（松本ら , 2024）ことが明らかとなっている。またICD-11の診断基準に基づき小学校高学年の児童のゲーム障害の有病率について調べた研究では5.6% の児童がその基準を超えていたという（Yamada et al, 2023）。

これらの若年層のアディクション問題は単に医学的な問題に留まらず、その背景には多様な心理社会的困難が潜在していると考えられる。アディクションは発達障害や、不登校、引きこもり、家族関係の問題、貧困といった本人の「生きづらさ」や孤立の結果として表出している側面があり（小林 , 2016）、先に触れた自己治療仮説に基づけば、若年層のアディクション問題に関しても、これらのような複合的な困難による「苦痛の緩和」のためにアディクション行動が選択されているとも理解できる。このような状況から、若年層のアディクション問題に対して、治療的な介入のみならず福祉的な視点からのアプローチについての検討が急がれる。特にアディクション問題の背景にある「生きづらさ」は個人の発達歴や家族関係、生活環境等と密接に結びついているため、支援の核として、まずは個人やその家族に焦点を当てた個別援助の役割が極めて重要である。そのため本研究では、日本の若年層のアディクション関連問題について、特に個別援助に焦点を当てたソーシャルワーク研究の状況を明らかにすることを目的とした。

２．研究方法

（１）方法

本研究では、日本における若者のアディクション関連問題に対する個別援助に焦点を当てたソーシャルワーク研究を系統的にマッピングし、既存の知見のギャップを特定するためスコーピングレビューを実施した。

なおスコーピングレビューとは、研究領域の基盤となるような概念や情報源、利用できる文献や情報の種類をまとめることであり、2005年に提唱された文献レビューの方法である（Arksey &O'Malley, 2005）。その後、さまざまな研究者が内容を吟味し発展させ、2018年にはスコーピングレビュー報告のためのチェックリストが発表されている（PRISMA-ScR:PRISMA extension for Scoping Reviews）（Tricco et al, 2018）。また2020年にはスコーピングレビューを行うためのガイドラインが作成され（Peters MDJ et al, 2020）、沖田ら（2021）により日本語訳の解説が行われている。本研究ではこれらのガイドラインに準じてレビューを実施した。なお倫理的配慮として、本研究は公開された文献のみを対象とした研究であり、未公開データや個人を特定可能な情報は扱っていない。

（２）選択基準

本研究のリサーチクエスチョンは「若年層のアディクション関連問題に対して、国内での個別援助に焦点を当てたソーシャルワーク研究から明らかになっている効果や課題は何か」とした。

スコーピングレビューでは、Patient（患者）、Concept（概念）、Context（文脈）の略でいわゆる「PCC」に基づいたフレームワークを使用し研究疑問を設定する。そこで本研究ではＰ（患者）：アディクション問題を抱える若年層（10 ～ 20代）、Ｃ（概念）：個別援助に焦点を当てたソーシャルワークに関する研究、Ｃ（文脈）：日本語で発表されているものと設定した。

なお、本研究における「ソーシャルワーク（個別援助）」とは、ソーシャルワークの多様な技術のうち、主に個別援助技術（ケースワーク）、およびそれに関連する機能（相談援助、ケースマネジメント）、あるいはソーシャルワーカー（社会福祉士、精神保健福祉士）による実践を指すものと操作的に定義した。

（３）検索方法

本研究では、国内における研究を概観するため CiNii と医学中央雑誌 Web 版の２つのデータベースを使用し文献検索を行った。検索式の作成にあたっては、事前に CiNii、医学中央雑誌 Web 版で予備検索を行い、得られた文献からキーワードを確認した。次にそれらを参考にしながら、リサーチクエスチョンに対応する概念毎に検索ワードを検討した（表１）。そして、設定した検索ワードを OR、概念を AND で繋ぎ、最終的な検索式とした。すなわち（若年 OR 若者 OR 青年 OR 思春期 OR 児童 OR 生徒 OR 中学生 OR 高校生 OR 大学生）AND（依存 OR 行動嗜癖 OR アディクション OR 乱用 OR 濫用 OR 物質使用障害 OR アルコール OR 薬物 OR 市販薬 OR 処方薬 OR インターネットゲーム障害 OR ギャンブル）AND（ソーシャルワーク OR ソーシャル・ワーク OR ソーシャルワーカー OR 社会福祉士 OR 精神保健福祉士 OR ケースワーク OR ケースマネジメント OR 相談支援 OR 相談援助）という検索式であった。なお予備検索の段階で原著論文の数が少ないことが明らかであったため、本研究では実践報告や会議録等のデータベースに索引付けられた全てのデータを対象とした。最終検索日は2025年10月14日であった。

表１　検索に用いた概念とキーワード

概念	若年層	アディクション問題	ソーシャルワークに関する研究
検索ワード	・若年 ・若者 ・青年 ・思春期 ・児童 ・生徒 ・中学生 ・高校生 ・大学生	・依存 ・行動嗜癖 ・アディクション ・乱用 ・濫用 ・物質使用障害 ・アルコール ・薬物 ・市販薬 ・処方薬 ・インターネットゲーム障害 ・ギャンブル	・ソーシャルワーク ・ソーシャル・ワーク ・ソーシャルワーカー ・社会福祉士 ・精神保健福祉士 ・ケースワーク ・ケースマネジメント ・相談支援 ・相談援助

（4）文献選択とデータ抽出

選択したデータベースより検索式を用いて抽出された文献を概観し、重複する文献を除外した。そして一次スクリーニングでは、第一著者と第二著者の２名が独立にタイトル及び抄録を確認し、本研究の選択基準に合致しない文献を除外した。次に二次スクリーニングでは、引き続き２名の研究者が独立して本文を精読し、本研究で設定した PCC のフレームワークに合致しない文献を除外した。なお意見が分かれた場合は両者による協議により検討を行った。

文献の選択後、本レビューの目的に関連するデータを抽出した。抽出したデータ項目は「著者名」「出版年」「文献種別」「タイトル」「研究目的」「研究デザインと対象」「研究結果と概要」であった。これらのデータ抽出に関しては第一著者が独立して行い、その後抽出内容について第二著者が検証し、最終的な結果とした。意見が分かれた場合には両者での協議により検討を行った。

（5）データ分析方法

抽出されたデータについて、本レビューの問いを検証するため内容に基づいて整理を行った。具体的には抽出されたデータ項目の内容の類似性を検討し分類する、主題分析の手法を用いた。

３．結果

文献選定のプロセスについて図１に示した。データベースによる検索の結果、CiNii では30件、医学中央雑誌 Web 版では107件の文献が抽出された。なお抽出された文献には、文部科学省の科学研究費助成事業による研究成果報告書が２件含まれていたため「研究成果」として挙げられていた文献をハンドサーチにより追加した。これらのうち重複文献６件を除外した133件について一次スクリーニングによりタイトルと要約の確認を行った結果、109件が除外された。そして二次スクリーニングによりフルテキストの確認を行ったところ、さらに19件が除外され、最終的に５件が採用された。なお、除外となった文献について、アディクション問題が主題ではなかったものが９件、若年層を対象としていなかったものが３件、ソーシャルワークに関連しなかったものが７件であった。

また採用された文献の概要については表２に示した。対象文献の研究デザインは事例研究法が１件、実践（症例）報告が４件であった。対象となったアディクションは、オンラインゲーム、メディア、シンナー等の薬物、性嗜好障害であり、「はじめに」で言及した市販薬や処方薬のオーバードー

ズに関するソーシャルワーク研究は含まれなかった。実践領域は教育領域（スクールソーシャルワーク）および精神科医療領域であった。

採用文献から抽出されたソーシャルワークの具体的な実践内容としては、「本人・家族との関係構築と介入」「他機関・多職種連携（ケースマネジメント）」の２点に大別された。 前者については、大西（2021）によるオンラインゲーム依存の生徒への継続的な関わりや家族関係調整、また内藤ら（2003）による当事者家族への継続的な関わりが挙げられる。また後者については、大西（2021）や山本（2024）による学校教職員やスクールカウンセラーとの協働体制の構築、石上（2011）や内藤ら（2003）による他機関連携や調整による社会資源の導入、北條（2024）による関係機関とのカンファレンス、デイケアや就労移行支援事業所の利用支援が行われていた。これらの介入の結果、支援対象者の生活が安定し問題が改善したり、薬物使用が止まったりしたことなど、ソーシャルワーク介入の有効性が示唆されていた。

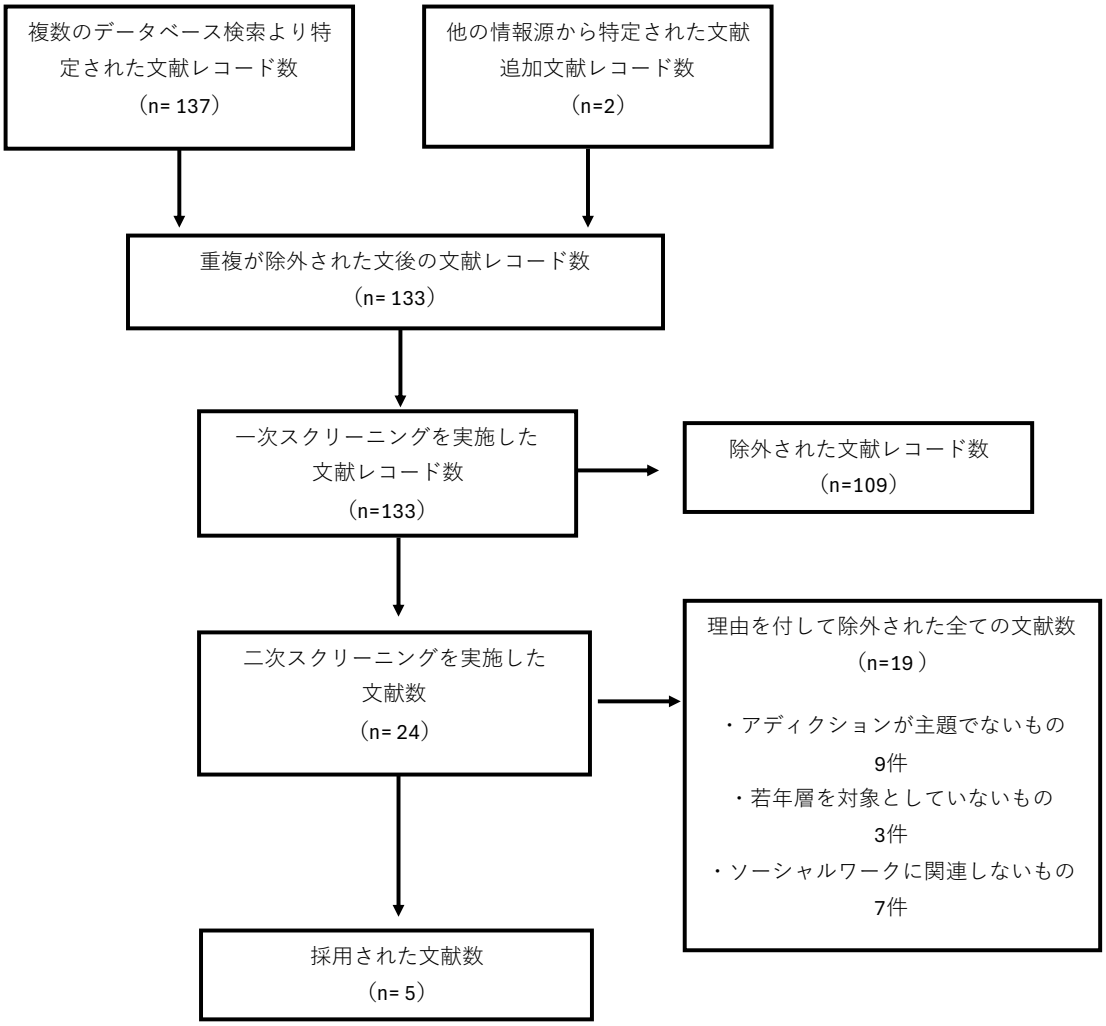

図１　文献選定のプロセス

表２　選定文献の要約

著者名・出版年	文献種別	タイトル	目的	研究デザインと対象	結果等の概要
大西・2021	原著論文/事例	オンラインゲームに依存することで不登校となった子どもへのソーシャルワーク：エコマップを用いたソーシャルワーカーの役割評価を中心に	オンラインゲームに依存することで不登校となった中学生にマッピング技法と「ソーシャルワーカーの役割分類」を用いて介入した効果を考察すること	著者の経験をもとに作成された架空事例の中学3年生（15歳）を対象としたシングル・システム・デザイン（単一事例研究法）	ソーシャルワーカーによる本人への継続的な関わりと家族関係調整、また教員とのケース会議と個別支援計画の作成および役割分担を経た介入により、対象者の状態像の改善がみられた。
山本・2024	会議録/事例	メディア使用に起因する諸問題へのスクールソーシャルワーカーの支援　精神保健福祉士に求められる専門性と学校との協働	メディアの長時間使用により様々な困難を抱えた生徒への支援の検討	メディア使用の課題を抱えた高校2年生との関わりについての実践報告	学校教職員やスクールカウンセラーとの協働体制が構築され、短期間でスムーズな支援が行えた。対象生徒含めたクラス全員への心理教育や教職員への情報発信、情報共有の場の設定等の関わりを意識した。
石上・2011	会議録/事例	一般精神科医療と児童虐待対応　養育者への治療・支援と子どもの保護をどのように連動させるか　精神疾患をもつ虐待問題家族支援の連携について　ー精神保健福祉士の臨床経験よりー	虐待問題を抱える事例への対応における精神保健福祉士の役割紹介	20歳でシンナー使用の課題を持つシングルマザーとの関わりについての実践報告	精神保健福祉士および多機関が関わったことにより、社会資源の導入ができ生活が安定し、虐待問題が改善された。
内藤ら・2003	原著論文/症例報告	子どもを持つ物質依存症者への援助ー特に配偶者のいない1人で育児をしているケースをめぐってー	医療機関が関わった、母子家庭で依存症者である2事例を通した援助の検討	2事例の実践報告（うち1事例が20代の女性であり、薬物依存症）	精神保健福祉士の継続的な関わりの中で、社会資源の導入や他機関との調整を行い、課題は山積しているものの薬物使用は止まった。
北條・2024	会議録	「発達障害とアディクション」精神保健福祉士の立場から実際事例への対応	依存症専門治療を行っているクリニックのデイケアを利用した発達障害と依存症の合併事例を紹介し、専門職に求められる関わりについて考察	3事例の実践報告（うち1事例が10代の男性であり、性嗜好障害）	デイケアの利用により新たな人間関係が形成され、治療プログラムにも積極的な参加がみられた。関係機関とのカンファレンスを重ね高校卒業が可能となり、その後は就労移行支援事業所に繋がった。

４．考察

本研究では、日本において若年層のアディクション問題に対する個別援助に焦点を当てたソーシャルワーク研究がどのように行われているのかを明らかにするため、スコーピングレビューを行った。検索結果からは５件の文献が抽出され、主に事例研究や実践報告が行われていることが明らかとなった。これらは教育領域や精神科医療領域からの実践報告であり、ソーシャルワーカーは相談支援や家族支援、他機関との連携によるケースマネジメントを担っていることが示されていた。

抽出された５件の実践では、「はじめに」において提示した山本（2015）の視点と重なる部分が見られた。例えば大西（2021）による家族関係調整は、山本の挙げている「家族関係に問題がある状況の理解」に基づいた実践であるといえる。また北條（2024）の実践では発達障害とアディクションが併存する事例について触れられていたが、これは「対人関係の難しいクライエントの理解」という視点に重なっている。自閉スペクトラム症などのいわゆる発達障害では、対人関係に困難を抱えることが多い。ソーシャルワーカーはそのような視点を持ちながら、当事者の抱える困難と関わり合っていくが求められる。そして、「結果」で触れた「他機関・多職種連携（ケースマネジメント）」は、「生活支援のなかで生じるアディクションへの支援」と関連している。「はじめに」で述べたように、

この視点は、アディクションの背景にある「生きづらさ」に対して「生きる価値を取り戻す支援」を行うことの重要性を示している。石上（2011）や内藤ら（2003）、北條（2024）による社会資源の導入や他機関との調整は、アディクション行動の背景にある孤立や生活上の困難に対して、社会参加の場やサポートを提供することで、まさに「生きる価値を取り戻す」ためのプロセスを支援していると捉えられる。これらのように数少ない実践報告の中にも、ソーシャルワークにおいて重要なアプローチの視点が含まれていた。

しかし一方で、山本（2015）の挙げる「援助を拒む人へのインターベンションアプローチ」に明確に焦点を当てた研究は、今回のレビューでは見当たらなかった。教育領域や精神科医療領域の実践においては、対象者がすでに援助を求めている状態でつながることが多い可能性が考えられる。そのため「つながる前」の段階、例えば保健所や児童相談所、あるいは地域でのアウトリーチ活動における個別援助の実践が今後の重要な研究課題であろう。若年層の支援では、援助希求の低さや複雑なトラウマを抱えるケースも想定されるため、この視点からの実践報告の蓄積が望まれる。

また「はじめに」で若年層の喫緊の課題として挙げた市販薬・処方薬の問題に関する研究が抽出されなかったことも研究ギャップである。この問題は社会問題化してからの日が浅く、実践は行われているものの、学術的な報告が追いついていない可能性が考えられる。また、市販薬の乱用の問題はSNSなどを通じて若者の間で共有され潜在化しやすい特性があると考えられ、相談援助につながること自体が困難になっている可能性も考慮すべきであろう。

今回のレビューを総括すると、全体として報告件数は少なく、またソーシャルワークの視点から体系的に研究された文献は見当たらなかった。まずは今後この領域に関して、実践報告を積み上げていくことが重要である。そして、そこから若年層に対する援助において、特有の視点や理論的示唆を検討していく必要があるといえる。そして介入の効果については量的な研究も必要であると考えられる。

最後に本研究の限界を述べる。まず本研究では日本語で書かれたものを対象としたことから、諸外国の研究動向をレビューしていない。海外においても若者のアディクション問題に対するソーシャルワーク視点からの研究は行われていると推察され、この点は今後の研究課題である。また本研究では個別援助に焦点を当てたことから「グループワーク」「コミュニティワーク」等の用語を含んでいない。そして「アウトリーチ」の語を含んでいなかったことが、結果に影響を与えた可能性がある。本研究は医学中央雑誌Web版とCiNiiの２つのデータベースを採用して行った。そのため、各専門学会の学術誌や大学・研究機関の紀要等で、データベース登録されていないものは網羅できていない可能性がある。

５．結論

本研究は、スコーピングレビューの手法を用いて、国内における若年層のアディクション問題に対する個別援助に焦点を当てたソーシャルワーク研究の動向を概観した。その結果、抽出された文献は５件と極めて少数であり、それらは教育領域や精神科医療領域における事例研究・実践報告であった。これらの実践は、当事者への関わりのみならず、家族支援や他機関連携を行ったソーシャルワークの重要な機能を示唆するものであったが、その効果の検証や理論的な体系化はなされておらず、また市販薬や処方薬乱用などの新たな課題に対応した研究は見当たらなかった。若年層のアディクション問題の背景にある福祉的課題に対応するため、今後は実践知の蓄積はもちろんであるが、介入効果の検証などの量的研究や、若年層に特化した支援モデルの開発が急がれる。

６．利益相反

本研究における利益相反は存在しない。

【引用文献】

・American Psychiatric Association（2022）. Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Fifth Edition, Text Revision. American Psychiatric Association.
・Arksey, H., O'Malley, L（2005）. Scoping Studies: Towards a Methodological Framework. International Journal of Social Research Methodology: Theory & Practice, 8（1）, 19–32.
・Khantzian, EJ（1985）. The self-medication hypothesis of addictive disorders: focus on heroin and cocaine dependence. American Journal of Psychiatry, 142（11）, 1259-1264.
・Peters, MDJ., Godfrey, C., McInerney, P., et al（2020）. Chapter 11: Scoping Reviews（2020 version）. In: Aromataris E, Munn Z（Editors）. JBI Manual for Evidence Synthesis, JBI. https://synthesismanual.jbi.global. https://doi.org/10.46658/JBIMES-20-12.
・Tricco, A., Lillie, E., Zarin, W., et al（2018）. PRISMA Extension for Scoping Reviews（PRISMA-ScR）: Checklist and Explanation. Annals of internal medicine, 169（7）, 467.
・Yamada, M., Sekine, M., Tatsuse, T（2023）. Pathological Gaming and Its Association With Lifestyle, Irritability, and School and Family Environments Among Japanese Elementary School Children. Journal of Epidemiology, 33（7）, 335-341.
・石上里美（2011）．一般精神科医療と児童虐待対応　養育者への治療・支援と子どもの保護をどのように連動させるか 精神疾患をもつ虐待問題家族支援の連携について 精神保健福祉士の臨床経験より．児童青年精神医学とその近接領域，52（3），302-304.
・大西良（2021）．オンラインゲームに依存することで不登校となった子どもへのソーシャルワークエコマップを用いたソーシャルワーカーの役割評価を中心に．筑紫女学園大学研究紀要，16，81-90.
・沖田勇帆，廣瀬卓哉，長志保，他（2021）．JBI Manual For Evidence Synthesis: Scoping Reviews 2020．スコーピングデビューのための最新版ガイドライン（日本語版）．日本臨床作業療法研究，８，37–42.
・カンツィアン，EJ.，アルバニーズ，MJ（2013）.『人はなぜ依存症になるのかー自己治療としてのアディクションー』（松本俊彦 訳）星和書店.
・北條聡（2024）.「発達障害とアディクション」精神保健福祉士の立場から実際事例への対応．外来精神医療，25（1），34-36.
・小林桜児（2016）.『人を信じられない病　信頼障害としてのアディクション』日本評論社.
・嶋根卓也，水野聡美，猪浦智史，他（2024）.『飲酒・喫煙・薬物乱用についての全国中学生意識・実態調査（2024年）』令和６年度厚生労働行政推進調査事業費補助金（医薬品・医療機器等レギュラーサイエンス政策研究事業）分担研究報告書.
・内藤千昭，雲川伸正，石上里美，他（2003）．子どもを持つ物質依存症者への援助ー特に配偶者のいない母子家庭を１人で育児をしているケースをめぐってー．アディクションと家族，20（1），75-81.
・松本俊彦，宇佐美貴士，沖田恭司，他（2024）.『全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査』令和６年度厚生労働行政推進調査事業費補助金（医薬品・医療機器等レギュラーサイエ

ンス政策研究事業）分担研究報告書.
・山本圭子（2024）．メディア使用に起因する諸問題へのスクールソーシャルワーカーの支援 精神保健福祉士に求められる専門性と学校との協働．精神保健福祉，55（2），101.
・山本由紀 編著，長坂和則 著（2015）.『対人援助職のためのアディクションアプローチ　依存する心の理解と生きづらさの支援』中央法規.

〈Peer-reviewed research paper〉

Social Work for Addiction-Related Issues Among Young People (Individual Assistance) — A Scoping Review of Japanese Literature —

Kuboki Tomohiro [*1], Saito Shizuho [*2,3]

Abstract

【Introduction】Addiction issues among young people necessitate social work research focused on individual assistance, given their perceived connection to underlying “difficulties in living.” The objective of this study was to provide an overview of social work (individual assistance) research addressing addiction issues among young people in Japan using a scoping review methodology, thereby clarifying research trends and gaps.

【Methods】Based on the JBI PCC Framework, Japanese literature concerning social work (individual assistance) for addiction problems among young people was targeted. Systematic searches were conducted in CiNii and the Japanese Medical Journal Web Edition (last search date: October 14, 2025).

【Result】Five studies were ultimately identified. All were case studies or practice reports, with the practice domains limited to education and psychiatric care. Content primarily focused on “building relationships with the individual and family” and “multi-agency collaboration (case management)”; however, no studies quantitatively verified intervention effects or focused on theory were found.

【Conclusion】Research on social work (individual assistance) for young people with addiction in Japan is extremely scarce, indicating a lack of accumulated practical knowledge. Moving forward, it is necessary to accumulate reports from diverse practice settings, develop intervention models, and conduct studies to verify their effectiveness.

Keywords：Young people, addiction, social work, case work, scoping review

＊1 Faculty of Human and Social Services, Yamanashi Prefectural University
＊2 Doctor's Program in Graduate School of Human Life Design, Course of Human Life Studies, Toyo University
＊3 Nonprofit Organization Kawasaki DARC Support Association